

追悼文

クラウス・リーゼンフーバー先生を悼む

八巻 和彦

リーゼンフーバー先生に最初にお会いしたのは、今を去ること半世紀近く前、東京教育大学で先生が講師をされ始めた中世哲学史の講義においてだった。当時、先生の日本語はまだそれほど流暢ではなかったが、講義はわかりやすく、必要に応じて、日本語も、それも少々筆順はおぼつかなかったが漢字さえも、黒板に書いてくださった。

中世哲学に関心をもって以来、日本人の書いた中世哲学史や翻訳された中世哲学史を何冊も読んでいた私であったが、いくら読んでも隔靴搔痒の感が残るいくつかの点があった。しかし先生の講義は、私が知りたかったこと、確認したかったことを、次々と明らかにして下さり、納得させてくださった。

その後、私が和歌山大学に就職したので、先生の講筵に連なることはできなくなったが、中世哲学会の大会でお会いすると、先生は私に声をかけて下さり、勉学を励ましてくださった。中世哲学会の大会で研究発表をさせてもらおうと、その直後に先生は「とてもよいご発表でしたね」などとおっしゃって、ほめてくださった。

それから程なくして、日本クザールヌス学会が発足すると、先生も会員になってくださり、大会の際には会員の発表に適切なコメントをしてくださいました。1986年に日本クザールヌス学会の編集で刊行した『クザールヌス研究序説』（国文社刊）にも、先生はご多忙にもかかわらず「知られざる神を知る——ニコラウス・クザールヌスにおける知の限界と超越」という論文を寄稿してくださいました。それは、ヨーロッパで刊行されたばか

りの研究論文をいくつも参照しつつまとめられた論文であった。先生もクザーヌに強い関心をもっておられたのである。

それよりも少し前に、私がクザーヌ研究の本場であるトリーア大学のクザーヌ研究所（当時の西ドイツ）で勉強するために、Humboldt 財団の研究奨学生に応募しようと考えて、財団に提出する推薦状を先生にお願いしたことがあった。先生は快諾してくださり、ほどなくして先生から推薦状が届いた。それを拝見して私は驚かされた。驚きの一つは、形式のことである。当時、すでに電動タイプライターの使用が普通であり、ワープロソフトも使用され始めていたにもかかわらず、先生は昔ながらの手動のタイプライターで普通よりも行間を詰めて長文の推薦状を書いて下さり、修正箇所は、修正テープも使用されずに、XXXXXX という風に消して、必要な箇所には行間に手書きさえ付されていたからである。もう一つの驚きは内容であった。先生が私の研究をとて綿密に読解してくださり、強く推薦してくださっていたからである。先生のご厚意には衷心から感謝したし、今も感謝している。

2年間のトリーア滞在を終えて1988年3月末に帰国した私を待っていた任務も、リーゼンフーバー先生に負うものだった。それは、『中世思想原典集成』の中の第17巻「中世末期の神秘思想」を、シリーズ最初の刊行とするということであった。この巻の監修者である小山宙丸先生が、早稲田大学の理事から総長になる時期に当たっていたので、私がこの巻を構成する諸々の著作の訳稿を集める仕事の中心を担うことになった。この任務遂行の過程で私は、リーゼンフーバー先生の学者としての優秀さのみならず、統率者・管理者としてのそれをも実感させられた。

先生がこのシリーズに注ぐ情熱は驚異的なものであった。私から先生に電話をすることもあったが、先生が電話をくださることもしばしばだった。その際に困ったことは、会話が長くなるにつれて先生のお声が次第にか細くなってきて、ほとんど聞こえなくなってしまうということであった。

1992年2月に第17巻がシリーズ最初の一冊としてようやく刊行されると、先生はとて喜んでくださった。こういうシリーズものは、最初の一冊目が出るのがとても重要なのですね。そうすると他の翻訳者た

ちも急いで仕事をしなければ、という思いに駆られるようになりますからねと、リーゼンフーバー先生は少しいたずらっぽく笑いながらおっしゃった。

その後の経過は、多くの中世哲学会の会員の方々ご自身がご経験のことと思われる。全 21 巻が 2002 年に完結したからである。その中に収載された翻訳のほとんどは初めて日本語に訳されたものであり、この翻訳作業に携わった方々は、ざっと 160 名にもものぼる。今からみると、これほどの膨大なシリーズを構想し、それにかくも多数の老若の日本人研究者を動員できたのは、リーゼンフーバー先生だからこそその偉業であると、よく分かる。先生の人格と学識がそれを可能としたのである。さらに、このシリーズが刊行されたことによって、日本における中世思想（厳密に言えば古代末期の地中海世界のキリスト教思想や近世のスコラ学も含めて）の研究が飛躍的に進んだことはもとより、刊行作業に「動員」されることで、この分野での研究者が増加したことも明らかである。

中世哲学会における先生のご活躍は会員にはよく知られていることであるが、都合 4 回、シンポジウムの提題者を務めて下さり、その度に、しっかりと準備をした講演をしてくださった。また、2016 年には日本宗教学会の公開講演会に特に招待されて、「意味への問い——宗教哲学の根拠づけのために——」と題して深い内容をもつ講演をされたことも、私の記憶に鮮明である。

先生は、事態の核心を的確に洞察する才能を持ち、それをさらっと表現する力をもっておられた。だから、それを聞き逃すかどうかは、われわれ自身の責任なのだ、と私はいつも肝に銘じて先生の言葉に耳を傾けてきた。

先生は日本での学術活動（そればかりではなく司牧活動にも）にのみ注力しておられたので、ヨーロッパでは先生の偉大さがあまり知られていなかった。それを残念に思って、2010 年 10 月にトリーアで開催されたクザーヌス・シンポジウムの講演者として招待してくれるように推薦した。先生は、2009 年に完結した西田幾多郎全集に自らが編集委員として関わるほどの広汎にして深い西田研究を踏まえて、“Transzendenz und Immanenz bei Cusanus im Gespräch mit Nishida Kitarō” という講演をなされた。先生の講演は、聴衆に強い感銘を与えたが、先生は何事もなかつ

たかのように淡々としてしておられた。

その夜のことである。夕食をとるために日本からの参加者が皆でレストランに入ったところ、飲み物の注文を取りに来たウエイトレスに対して先生は 'Leitungswasser bitte!' と言われた。西欧では、レストランで食事をする際には飲み物も注文するのがエチケットである上に、どう見ても西洋人、それも発音から判断するとドイツ人に違いない人物から、「水道の水で結構です」と言われたので、そのウエイトレスはびっくりして聞き返した。先生はキッチンの方を指さして同じ言葉を繰り返して、平然としておられた。私はそこに、先生の信念（信仰）の人としての確信を見た思いがした。自分の祖国ではあっても不合理な習慣には従わない。本当に必要なものだけを必要とし、その点では妥協はしない、というお姿であった。

先生のお働きは、哲学や神学の分野のみならず、広く学術一般にも及んでいた。先生のお兄さんで、コール政権において11年間の長きにわたって科学技術大臣を務めた Heinz Riesenhuber 氏から、或る時に直接にうかがったことである。私が「あなたの弟さんのリーゼンフーバー先生は、日本の哲学や神学の分野でとても重要な貢献をしてくださっています」と話したところ、お兄さんはそれに応えて、「彼は自分の専門分野だけではなく、いろいろと私を助けてくれてもいるんですよ。彼はドイツ大使館がとうてい及ばないネットワークをもっているのです、外国人が行けないようなところにも行けるように取り計らってくれています」と、嬉しそうに話してくれた。後日、そのことを先生にお話したら、先生はいつものようにほほえみながら「そうですね」と応じられた。

2020年の2月初めに、リーゼンフーバー先生がお住いのイエズス会の老人ホームへの連絡方法を、佐藤直子先生が教えてくださった。しかし、まもなくコロナの大流行となり、老人ホームに先生をお訪ねすることができない日々となった。そうこうしているうちに、先生の訃報に接することになってしまったのである。中世哲学会としても、個人としても、学問的に大にお世話になった先生に、心からの感謝の念をお目にかかって直接にお伝えすることができないままになってしまったのは、残念至極である。僭越ながら中世哲学に関心をもつすべての人々を代表して、ここに亡きクラウス・リーゼンフーバー先生に心からの御礼を申

し上げる次第である。

Prof. Dr. Klaus Riesenhuber SJ は 2022 年 3 月 31 日に逝去された。